

サミュエル・バーバー作曲〈ノックスヴィル：1915年の夏〉 ——委嘱の背景にみる作品像

紅村兆乃 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（音楽学領域）

要旨

サミュエル・バーバー Samuel Barber (1910-1981) は、革新性の追求や国民的語法の探究が特徴的であった 20 世紀アメリカの音楽界で活動した。このような時代にありながら、バーバーは主に 19 世紀後期の和声語法や伝統的な形式に基礎を置き、ロマン主義的な叙情性を有した作品を手がけた。20 世紀アメリカ音楽界の主流ではないとする見方も一部では存在したが、バーバーの作曲家としての地位は 30 歳を迎える頃には確立され、国際的な音楽祭や音楽評議会等で名誉ある地位を得ることとなる。バーバーのように作曲活動のみで生計を立てられた作曲家は、当時のアメリカにおいて稀有な存在であった。

ソプラノとオーケストラのための作品〈ノックスヴィル：1915年の夏 *Knoxville: Summer of 1915*〉は、第二次世界大戦終戦から間もない 1947 年に作曲された。1940 年代以降のバーバー作品には、当時の流行に影響されたモダンニズム的要素が見られるようになるが、本作の作風は初期の頃に戻っている。また、作品全体の 3 分の 2 に及ぶ声楽曲のうち、バーバー自身が“叙情的狂詩曲 *Lyric rhapsody*”と形容した本作は、その聴きやすい美しさとテキストの主題とにより、屈指の人気を誇っている。これまで、バーバー研究の第一人者バーバラ・ヘイマン Barbara Heyman (生年不詳) の著書にもあるように、「素直な情感と感覚をもってして、子供時代の記憶に伴う郷愁の念をとらえることに成功した」作品として、「バーバーが手がけた中で最もアメリカ的」なものとして評価されてきた。また、バーバーが強い共感を覚え、数日で作曲したエイジの散文詩についても「これまで書かれたどんな作品よりも明確で独創的でアメリカらしいテキスト」とされており、バーバーがアメリカ的テーマを強くもつテキストを選んだ例は他にないためか、“アメリカらしい”作品としてのイメージが先行している。また、音楽がテキストの“アメリカらしさ”を反映しているという前提のもと、ジェーン・ドレSSLラー Jane K. Dressler (生没年不詳)

等による先行研究で、テキストと音楽との結びつきについて論じられてきたが、委嘱作品であることは重視されていない。

本論文では、本作がソプラノ歌手エレノア・スティーバー Elanor Steber (1914-1990) より委嘱され、ボストン交響楽団にて初演されるまでの過程に着目し、本作の作品像および本作が証明しうるバーバーの作曲家像を提示することを目的としている。

論文全体は全3章から成っている。

第1章では、バーバーや〈ノックスヴィル：1915年の夏〉についての基礎的な事柄を概観した。バーバー作品の音楽的特徴は、19世紀後期の音楽語法やテキストから着想を得た抒情性、哀愁を備えた息の長い旋律線などの言葉で表される。これらの特徴は、聴衆にとって聴きやすい美しさをもつ作品を提供し続けることを可能にし、多くの委嘱作を手がけた作曲家としての地位を確立させた。バーバーのキャリアにおける重要性を有しながら、これまで研究主題とされてこなかった“委嘱”にかかる彼の作曲姿勢を示すものとして、本作の新たな作品像の可能性を提示した。

第2章および第3章では、本作が初演されるまでの経緯や背景に着目した。第2章では初演のソリストを務めたスティーバーによる委嘱の背景、および“声楽とオーケストラのための作品”の作曲を提案したサージ・クセヴィツキー Serge A. Koussevitzky (1874-1951) の意向を論点とし、第3章では、初演が行われたボストン交響楽団の伝統や聴衆の嗜好について考察した。その中で、第二次世界大戦後の変動期にあるアメリカ音楽界における、作曲家、演奏家、そしてオーケストラの3者の相互関係を本作委嘱の経緯に見出した。

〈ノックスヴィル：1915年の夏〉の音楽面において、バーバーは委嘱者の意向や初演の場を考慮し、当初に構想された「親密な雰囲気のある作品」ではなく、より大規模で豪華な作品として手がけている。これは批評等にも見られるように本作を語る際に挙げられる明確な特徴の一つとなった。しかし細部では、テキストを反映しているとして先行研究で指摘された音楽要素も、その多くはバーバー作品に広く見られるものであり、幅広く聴衆に訴えかける叙情性を有するバーバーの音楽を明確に表す作品像を〈ノックスヴィル：1915年の夏〉に認めることができる。